

審査の結果の要旨

氏名 西村明

西村明氏の「戦争死者慰霊の宗教学的的研究」は、文明史的展望の下に現代の戦争死者に対する慰霊行為の特徴を理論的に明らかにする一方、長崎の原爆被災者の慰霊を例として死者への関わりがはらむ宗教性の意義に迫る実証的調査研究をも志した、複合的で野心的な業績である。西村氏は、従来、別々に取り上げられることが多かった戦死者（戦没兵士）と戦災死者への慰霊行為を「戦争死者」へのそれとして包括的に取り上げ、身近な他者の、また生者が濃淡の関わりをもつ社会成員の、暴力による死の意味を問う行為として考察する。西村氏は世俗主義的な響きをもつ「追悼」という語をあえて避け、「慰霊」や「たましい」といった用語を分析概念として用いる。それは戦争死者に向き合おうとする生者の言葉や儀礼を、生者と死者が相互性をもって関わり合う行為としてとらえようとする方法論によっている。死者は沈黙して生者の作用を受ける客体なのではなく、暴力の中でなお生き続けている生者に、過去から痛みとともに問いかけて来る存在だという理解である。

このような理解は、日本の歴史の中で戦争死者がどのように慰霊されて来たかという展望と関連づけて導き出されている。宗教学者や歴史学者の業績を参照しながら、西村氏は死者が生者に働きかけてくるのに応答しようとする信仰が、政治的な機能を封じられるとともに、他方では大衆化していく中世から近世への歴史的過程を、各時代の「暴力連関」に対応した慰霊の形態としてとらえる。次いで暴力を国家が独占して全国民が戦争に関与することに備えようとする近代国家が、まったく新たな暴力連関を形成するというマクロ社会学的理解を踏まえて、「顕彰」に重きを置く国家主導の近代的慰霊が破綻するところから第二次世界大戦後の慰霊の新たな特徴が展開してくるさまが読み取られる。近代国家は死者を集合化させるが、そのために同国人の死者と異国人の死者が峻別され、「哀悼」の姿勢が抑圧される。戦後の慰霊は哀悼の回復とともに、なお引き続く死者の集合化の影響力を超えていくような諸形態を現出させる。

以上のような歴史的展望の下に、長崎でそれぞれに独自の慰霊を行った医師永井隆、牧師岡正治、長崎医大の戦災死者の遺族の、それぞれの死者への向き合い方が、また市や国の慰霊の姿勢とそれへの住民の対応の諸事例が分析されている。大きな構想力をもった独創的な理論的展望を携えつつ、具体的な事例研究から人間的行為の豊かな表情がくみ上げられ、現代日本の慰霊の特徴が的確にとらえられている。そうした分析を通して宗教理論・宗教史理論を更新する可能性を示すとともに、現代世界が問いかける政治的・倫理的問題に対する実存的かつ実践的な応答が試みられている。

多くの理論的道具立てが組み込まれており、まだ十分に練られていない概念があり、理論的な分析にとどまっている部分もある。しかし、大きな発展の可能性をほらみ、潜在的可能性に富んだ業績である。よって審査委員会は本論文が博士（文学）の学位を授与するに値するものと判断する。